

日本スポーツ界よ!

本質から 目を背けず 改革から逃げるな!

玉木正之 × 坂上康博

スポーツ対談

教授/専攻
橋大 学名 譽教
スポー ツ史 専攻

玉木 坂上さんは、学生時代に剣道をやっておられて、剣道や柔道といった武道、さらにオリンピックや野球に関する著書を数多く発表されています。私は、「スポーツと政治」(山川出版社)「権力装

置としてのスポーツ 帝国日本の国家戦略」(講談社選書メチエ)といった作品で、スポーツと日本の政治や社会との関係を学ばせていただきました。そこで今日は日本のスポーツ全般の問題点をいろいろお訊きたいと思います。

坂上 その前に私のほうから質問させてください。以前から玉木さんに訊きたかったのですが、ロバート・ホワイティングの本を翻訳出版されましたよね?

玉木 はい。「和をもって日本となす」(角川文庫)で、日本野球の歴史や日米の野球の相違点などが書かれていて、1990年に出版された単行本は10万部を超えるベストセラーになりました。

坂上 あの本は、日本の野球界やスポーツ界にとって、かなりのインパクトがありました。

玉木 はい。日本の野球の歴史で、明治時代に朝日新聞社が「野球害毒論」と呼ばれる野球批判を展開したことや、4年後に手のひらを返して今の高校野球の夏の甲子園大会を始めたことなど、ホワイティングは、日本の野球の歴史

は日本版では割愛しても良いのではないかと提案してきたのですが、日本人こそ日本の野球の歴史を知らないのではカットすべきではないと判断し、600頁を超える分厚い本になりました。文庫は上下2巻本です。

坂上 その後玉木さんはスポーツライター廃業宣言をされた。そしてまた復活された。その経緯を訊きたかったのです。というのは、ホワイティングの本は日本の野球界に対してかなり辛辣な批判が含まれていて、玉木さんもいろいろ日本の野球界、スポーツ界に対する批判を書かれていた。けど、まったく変わらないスポーツ界に苛立ちを感じてスポーツライターをやめたのかな、と思ったのです。

玉木 それほどの苛立ちではなかったのですが、日本のスポーツ界批判が少々暖簾に腕押しと感じられていました。そのとき私は『京都祇園遁走曲』という半自伝的小説を『オール读物』に連載していて、直木賞いけるよなんて煽られて、よし、これで賞でも取れば、自分のスポーツ界批判も、もう少

し影響が出るかも……なんて思っ
てスポーツライターは一端休止。
小説に専念したんです。

坂上 そうだったんですか。

玉木 ところが文藝春秋社で『マルコポーロ事件』が起きて大批判を浴び、大量の人事異動で小生の直木賞も雲散霧消。NHKの連続ドラマになりましたが、私の企みは水の泡に(笑)。その間に、93年のJリーグの開幕と95年の野茂英雄投手のメジャー挑戦という大事件が起きた。

坂上 ちょうどその頃は日本のスポーツ界が大きく揺れ動き、欧米のやり方や考え方も取り入れ始めましたね。

玉木 やはりJリーグの誕生が一番大きな出来事でした。今度出版した『真夏の甲子園はいらない問題だらけの高校野球』(岩波ブックレット)にも書きましたが、プロ野球は親会社の宣伝のために存在し、高校野球は高校生の教育という建前がある。日本のスポーツには必ずスポーツ以外の目的があったのですね。ところがJリーグ初代チェアマンの川淵三郎さん